

「認知的不協和」について考える

やまね まさゆき
山根 正幸

●連合 企画局長

新型コロナウイルスの影響が世界に広がっている。日本国内でも感染例は増えつつあり、本稿執筆時点（2月25日）で抑止の見通しは明らかでない。その中で対応の最前線で尽力されている方々には頭が下がる。今後の社会経済への影響も懸念されるだけに早期の終息を願いたいし、私たちが日常の中で出来ることに努めたい。

ところで、この問題をめぐっては、発生源とされている中国・武漢で、原因不明の肺炎について最初に警鐘を鳴らした医師に対して、地元当局が「事実でない情報を流し、社会秩序を乱した」との理由で訓戒処分を行ったという。このニュースが報じられた後、当局の対応が初動の遅れと感染の拡大につながったのではないかと、当局への批判が集中した。この出来事に対する受け止めは様々あると思うが、私が改めて考えさせられたのは、自らにとって想定外の事象が発生したとき、あるいは不都合なことが起きたときに現れる、人の心理と集団や組織の行動についてである。

人は、自らの信念や習慣的な思考パターンを覆すような反証が提示されると、心理面に強い矛盾を生じるようになる。心理学ではこれを「認知的不協和」と呼ぶそうだ。では、不協和の状態を人はどのように解消するのか。一つは、元々の信念や思考を補強する新たな認知を持ち込む。もう一つは、反証に対して、その価値を貶めるような評価をする。そのようにして自らの考えの価値を保つことで不安定の解消をはかるとするのが心理学の説明である。特徴的な例

は、災害が迫っているにもかかわらず自分だけは大丈夫とってしまう「正常性バイアス」（今回の新型コロナウイルスについても当てはまるかもしれない）や、イソップ物語で有名な、木になったブドウに手が届かないキツネが「どうせあのブドウは酸っぱくて食べられないに決まってる」という話だ。

意識や行動の変化を迫られたとき、逆に自説にこだわってしまうのは、人に備わった心理の機能による側面もあるとはいえ、自説を守るための行動次第では、新たな問題が起こらないとも限らない。しかも、それが個人だけでなく、集団や組織の行動にも作用するとすればどうだろうか。不正の可能性を指摘された行政機関が、自らの無謬性にこだわるあまり、問題が存在しないかのようにふるまい、時には国民の共有財産であるべき公文書の改ざん・隠蔽に及ぶ。あるいは、効果が出ない政策について見直しに舵を切るのではなく、原因は他にあるとしてその政策に固執する。異次元の金融緩和の継続、甘い財政見通しで予算を組むことの繰り返しも、認知的不協和のアヤに集団的にはまっているのではないかと思わずにはいられない。

とは言いながらも、自分自身はどうかと問われれば偉そうなことはいえない。従来の思考にこだわっていると感じたときには、「ひょっとしたら認知的不協和のせいかもしれない」と客観的に捉えてみることで、自分の判断や行動パターンを見つめ直すきっかけにしたいと思う。